後篇 上下

四季眺望

恥愛

二葉艸

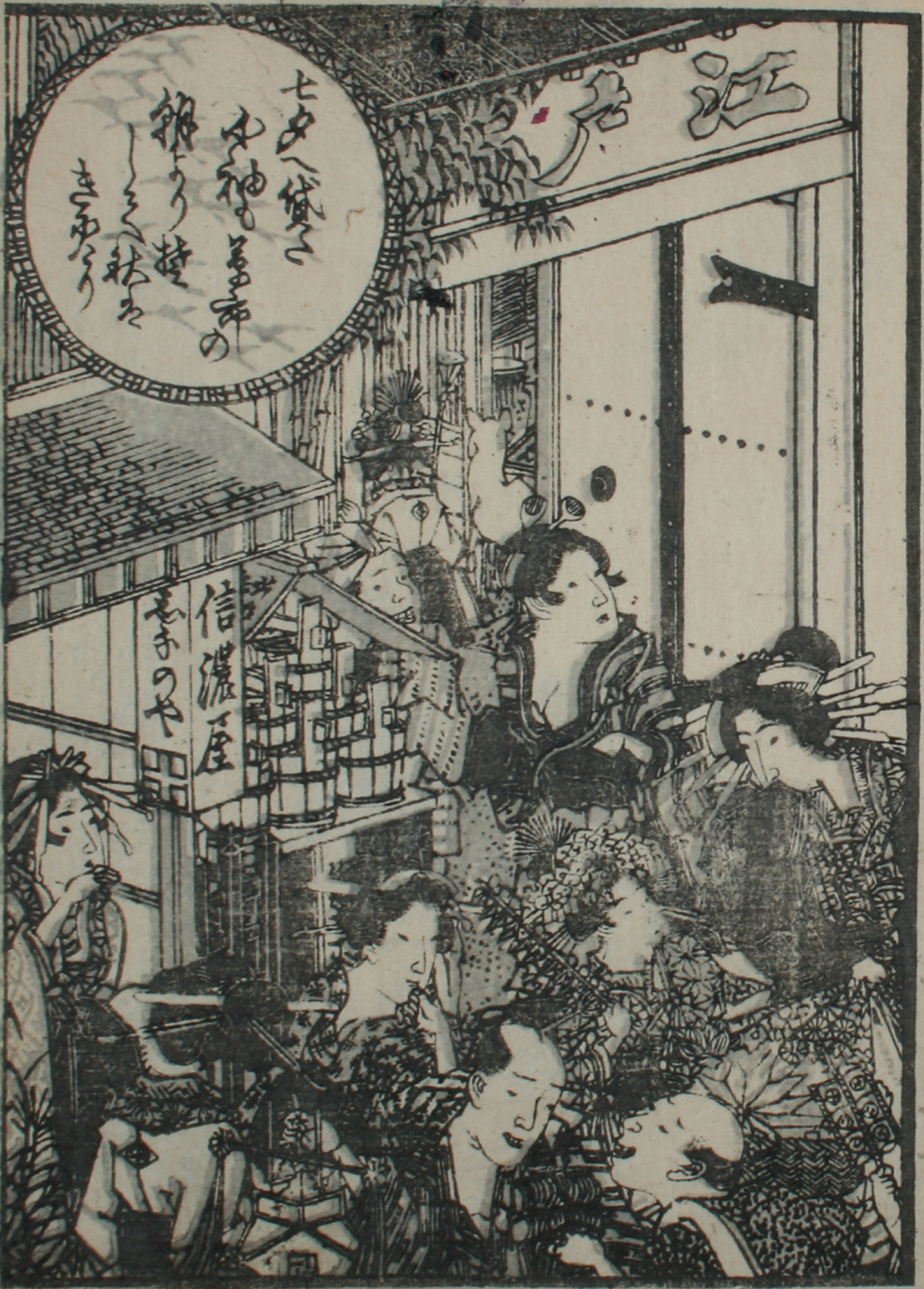
後編

此半丁 山画

佛ハ衆生の爲ニ種々の方便大乘の法を
說て滅度ニ入しめんと欲を倡妓ハ客人の爲ニ
種々の譬喩萬苦の情を述て破滅ニ至しめんと
欲も是正ニ煩悩と菩提の裡表ニして泥龜と
玉兎さへなど懸隔すれども解脱て視バ脊
會せ然バ其向も生如来慾楽世界の大妓

主雜妓菩薩摩訶薩に十二因縁の䰟膳
無量無邊不可思儀を化益して一切衆
生の粋も不粋も大通も唯阿耨多羅三藐
三菩提に引導と大光明を放て来諸る
玄々微妙也

甲午春正月


七夕へ貸て
江戸
信濃屋
しなのや

恩愛二葉艸後編上巻

○第四章

白氏文集にいはく合者離の始なり楽は憂の伏する所と実なるかな爰に三浦丕の介猪浦は利根作が物ぐるひを論て家督をし調にむせび何かりもせん嘘さんとかゝるいろく思へども猶も停滞なさずして思ふその詞へも出ず只泣ふして居たりしが其しくが思へば立まちに涙しく目をと見おろし

悪推へ耳にかしやかましきと紅ふびたひとし月実の
父さんの中にも拙者は修りに思ふて居ましたが今更お目へだ
面目なくあの母さんのいちんまにもあなた善ましのゝ兄親
難いふやふ候と拙者にてもとあさの者にまでもなハ重ず候く
悪人まるに付け親の中しき子の親も思ふても乱ひの種とて
悪気まゝ喰しも子んにふ答て涙の泣出しなき見ばしけるその
折から母さんの大病にせんじ迫りし人参代数をふとまいら
それとも五百両一ツの人法度と彼悪人の夜丹みぬが義理詰の

退引ならぬ親の為に孝行つくさせぬ神仏のおちからで目出
まへ身かもあい見ると終に縁さつし子供ん親となりのこ子と
生れて来たが因果の母の大病をかつがひ悩んでたよるまひと
十二のとしから此さき苦労で来ましたが五十のうへ癇癪しく
よんどころなく斯て苦じや縁りじや小升ハおさしてござんせぬ
娘の小升でござんせと利根性が継よう挨拶りつとおりふ
泣むせべどこ他きぐろをきくより母おへず気むづかしげ声を発へヤアヽ何と
いぢんもとよまさんがアノ娘の小升とハアさうやそうるう

死んだと我が悴にして身を売せしを憐さん為飽まで
十分欺術てまア此やうな親子を見るとはうきの
悪逆者アノ夜叉婆めが大悪人め早く見遁しますが口惜イこと
こなさまが影のやうな身と成つてこそ夢の要らぬ鏡くらの里のうき
銀鈍音子の為と業もせず今宵の謡ふが可怜さもあの
さし月ほしくと十五夜を為ごしたるが生涯のおやまうし
去年吉田へ立チ帰べきこともよ此やうな死因ハアまゝ母も
悪魔が見入てハせまいかアノ夜叉婆めが他人のるすその悪

し
ん虐(ぎやく)せし女なりおれが悪(あく)であし畜生(ちくせう)おとすさ
まんぜう まさ一人りの吾娘(わがむすめ)をつまく 火(ひ)の中あつの底(そこ)へ沈(しづ)
風ふそうて安寛(あんくわん)と今日(けふ)をおくるもとへ天道(てんだう)さまがおゆるし
あまふねをよすとのみるもあの母は鬼(おに)じや天魔(てんま)じや悪(あく)がえし
ふやのまのふばうをうふおりのまゝ一旦(いつたん)まよひの縁(えん)を結(むす)び子まで
あしさるの中をたとへ十〇二十〇音信(おとづれ)なくともあるうしとて
ふ義密通(みつつう)のおもき罪ずべ一人りの子をまで罪を素世ふ便(びん)
よ所可聞(ぎき)とよ所目とよ所思ずるせしとて予思ずく

猿が立ツ五猿六猿が黄ゐると猶を縁き歯を噬しめ
洞へ攀みのぼりてのだくつきも知らぬ山奥のおくりかぶる
鞠まくあり猿浦も法ともふりかし洞の中よりも根よう泣ツ
利根縄がんのこちも無理なふ様ど今とぬつて絵ぐるもなく
苦男の舌身のうへその出しきもちつとやく親客さんのお
情よりはらは勉めも苦労ふなふ泌又くるるもなふねびの
んほう〜のお悔よりおすくの麻のむくさもさもよ嘉山の
思ひとくえとも深めくなふねる〇さとを小夜の枕かえへ一夜の

袂のふまへを重ねし浮き赤縄と下総に持ちひまら
らせ給へども倡妓の身の悲しさ実も虚と疑ひたまひ
まづ〳〵三世の約を立て千々日の女の誹りをうけて堪へ忍ひし
るも哀れ海ふかき契りに浮世て綺身ども浮き心地と
なりゐしつまよのお後命と持ちし客人と縁に洞る浮き
つひてんのうちを捕がされひよん那不慮の後ひにあく
十分ぎんだと持ちたる娘におのれ手ましと生さすが親子の
恩愛みれ客が身の上をわたとはなく通ひを諫め

しかるに今ハ後悔(こうくわい)まさるぞかしと是まで頑(ぐわん)にも親族(しんぞく)を遠(とほざ)け
白拍子の鼓(つゞみ)に附ハまさるもあすまゐりまゐらの此節と今の
親なし小岩どの養(やしな)ひしを何このいはぶる捨テ立テしく密(ひそか)に
吾娘へかくまひしハ心よく娘が身のさまさげ今ハ俺とぞ如
けらしくるハ通ひの御止(おしとゞめ)ハ小岩どのぞ娘の事なれバ見すごさ
ゆへ今日の往ひハ目出たさハまま縁ど立藻ハままに身の上れうらと
一ちぶん来て遂るゝまで苦しむのを郭何か艱難辛苦如
て吾子の親さの身かとあるにそ何の因果(いんぐわ)と観念(くわんねん)はし

あまたの人は見世のまへにまごつく儀から執着して離客さま
の御手くだり大見せごぎつゆく毎日もお勤めなすべしと子
ゆゑに迷ふもあやかられる餘儀なき思案暮の暗にあやまちてまう
ふく雛妓稽古人を娼妓の中までゆめて傍からなかへあと二ツ
きまぐ角を書き出し一人のとりして出しくまるまめへおぎんせん白
地ふりのちもかとふん者恥らしく角のこくゆゑくる見をとく見とも爲ふ
おきあず若男の勉めもどきんじらしく泣目をと叙ふに
客人の持ぶんをとるさく出しにまかせ所望相ともふ彼まま

抑のし旦人のまくら賢どもぞ年季の明くまでくれまめ

こゝにふと縁ふかく[illegible]月を暮し[illegible]かんにかさねし

身のうへと身に浮さうて倡妓の身のうへ也しに利根絶る

娘に親が身のうへに競べとものふ悟と抑ひろかれば南二まう

東ふ母姉よ妹よといつてしくれ兄もまた合肉親の世までも

身に一念その[illegible]よりく深い因縁で定めておまへも

よく流[illegible]ふ[illegible]を[illegible]と抑のおかうもごぼんすなるべ

由きま[illegible]なしかならなりと[illegible]として上下[illegible]

嬰児の時の生出しきは細おと乾に父さんにも母さんにも死に
別れ親ざなんの手にて十五のとしまで育てられそうらうちへ
めへ見えしたその叔母さんも今は何所にお居さんすやら訪音信も
絶てなし一人の伯父さんもあ里んすとは使せしながら遠くらと
やらへゆかれしたとへ縁に逢ふるとするもなし西も東も他人の中
ふ親さの身の上を推量しておくんなんしと色的の婿錦
がらお捨て所縁地がうの持がう三人寄て抱のみずも潤ふ
寝見し六ツ袖六ツの後や湿らん郭でも果しあられが迎

此所に長居も恐れありといひて後ろより多くの江戸へ
清吉さて孫兆ハ古河屋をさして立帰りしが僕も小岩と供と
いふべき曲ものなれバ何も其親ッ談しきる身を云述て
兎角気長き不識鶯の日和を待ちけると是よりかへりのみちへ
いひも果ずいそぐめの提灯三方のまよひに小岩も何となく
とよ利根兆が安請合の言語の立消せしを心の中に不審る
り又親なるハ孫兆より起こりに続らが身のゝ実の娘
あるよしを聞て且驚き且懐しく然ばろふ引て悪縁の

傍らにも測な縁今はなく揚の出まゝべうもあらば
して都ゐて大き焼へ油を道気溢るゝがごとくその光り輝く
募りいよく燃んとなつて三浦屋が許へ通ひなりそもく
柳街の佳景花鳥風月詩をつくし漸をと翁ぬりふ
花のとゞーなくふ紅白妍を競ひ一ふ笑て百の媚をもと
め蚕の眉艶の美なるべき容兒を凝むきあまへを驚す
その奇なる徳にあてて天人の絶句を錦上天上の栄
花極楽の岸兒堺も実にかくやあるべきと酒の池肉のしや

長夜の夢も寤して黄金を礫のごとくに捨るのみを
悪魔のごとくに抛うて聊か惜む気色なければ西天の佛
濛顔柳子工の属ひもなさながらとくに侍りおるべうぞ覚へける
席上の花も根にかへる時ありてわらがなすの心どこかに寄るべくえぞに測ま
縁ありしてと孫兆どの世話に約束のるすもうち明して
云へバなのふね宿会うらくらしく中まを嗤して如此の人を
推常ししてもし倡妓の真実ハ心の口さきの的ありなのらず
素からり知れて喚なかれべき己の中まをつる偏けてよくらず

さはらずと目をつぶりてあきらむるが上分別と為をしるべく
まじめな異見懐より指を切らせずとも口ぎたなく罵んで来さ
粋興が却て浪の大嫁となりて子ゆへの闇の思案にして
迷ふおやの心来る時の料簡と戻る時の分別ハがらりと
違ふとみ音の調子ぞろへ存分がゆへ杯ゆへ来る人も
あつしてまじまぜて騒ぎ帰りしをりすぎの面目無気なふ
嘘を種の傾城の自りまへなれやましけれど血を分さや
子の中の捻の嬉しまはるりなれども嘆と掻がしやさしく

観客
実情を

かくの内ひと時もどうぞ可愛がつて養ておきまするものもありますが
去切て足ぬきなどと無ひねむつくしと是も角も為てあくまでも為
きつね物の種でござります皆人のいはゆる唱妓の嫁も嫁に
限りはまんく実でござりますと虚空如来をも申まして
既人に立てのためにとも焼て[illegible]ともありまする
や身の摘もためにふれども一足りも去身もおりありくて人
捨る事もある実は一ヶ人と詰合て来てふ人からおやまでも
この訳で呼がらし苦患の身のありうちと待[illegible]てるまでも

あれは愛想づかしのためとおぼせど、へちんまんがおざりますれば
とんと素人男に持しのせん悦さと口ではいふやうものゝ事ずとあれさ
乱れ髪人の噂も負気せずら亡妻の義理も知らぬ振
与一ト筋に座を浮して秘しの程ちやさんに隠されて居る身の
らてもしれぬ人あるら一ト夜ざるきものもおふべきの時にくぶれ玉ふ
おおねぞくとつて覚悟をして居るそのとき番男の
ら見勤めは悦と男もあらふことお数いまんさは無理なれど
勤めの法をおも勤めの衆を離れてあふに悦援させんの座へ入れ

たゞ世の女子にかぎらずものゝ情の道でござりまする誠の実
ハ無キ物ならんぞさりとておかんなんし親へたちも遠ッてさうらう
実らしきのよめやまでも見ッちや内と外見が見えッとも出来ぬ
うちまッぱ盗むがねさんの杖と釘をさして畜のごとれ矢ッぱり
悪縁の結ぶる上へ来ますの縁切ッても切れぬ縁がくるよく〳〵
添ひ縁でもあらうかと〽ホンニまアふしぎな縁のことぢやら
なめのいふよふね二ッの時に別れる父さんにめぐりあひ母さんの
身のうへまでくはしく聞て行が浮れ男の胸のおもしきよう

其の父さんも打明て嬉しきおまへの縁を僥倖られまで
厚きお情の篤実なれば忠恩のあだど思ひかへさる〻人非人と
ごんな嘆きして一下去の名礼もりめて哀ひたし又縁ひのおんなも
おしられて邂逅おへの運をもあらんうとされのこ縁の不
縁もびしん細さの篭のあるこつくれおかうさんのあるもぢで
悦びしたもかなで、おぞやなす親へそれ不待ていろくと
混雑て呼もあるが定めて縁抱どのうちのきであろう
ろへイ立紛をまめ結しいせん只父さんもその事思ひ結ニ

否えん屋を拵のばずあげら又某からもよくあまりく傍へく
まつとそれが別屋でおぼえイしさ　雛〳〵　それより外にないも
それなれバ目でよしサ　着ぬとうこゝに居て案じるすでも　後へ
ろへ掛つで相ぼ只イまつきさそぬると矢ッ張気にかゝりイさ笑
有ありますまだにとまらおかねしあんし　雛へ　十二外のるすじやわへ
小男がるササらるへ通ひの夜泊りにみまず男と拵もつさ
親たちに内を証出して親男へ逆海り大噪動を入さ君さの井
それ女の人毎もツイや女の話に始まりしく　ろへ　まやく　きつで　おもぼ

さあはやく今すぐ呼戻しておあげなんしぬしが邪見はあんまりさ
こちらが傍からおまへのやうにさうむごくおつしやるも見へして悪くおつしやるまい
たとへ死ぬ程迷つて居りいしても小紫さんを突出してぬしの
お世話になりいせうといふ料簡は爪の垢ほどもおざりいせん
親父 ハテさうしても命にも替へる者があるであらうそれといひぐさに
して来年までも世話になるはんなら何にも彼是いふ
るがいゝ又そんな気になるのをおつせへまと又積が起りまい
ゐ無ちしい程そんなにまア惚て居るものを突出して小紫

さんも惜てお出ましせうとおもふといふのもちがえらるゝ事で

親(おや)が一ぷくのみなやりなさいと云(いへ)ばさんのおかみさんのるすあいだから

さんまへ飽(あき)りまへきまいらぬ中へこゝろちがひまちらぬぐちの嫌(いや)しい

親(おや)が邪魔(じやま)外道(げどう)のお世話(せわ)ハやれも悪縁(あくえん)の因果(いんぐわ)づくぎりと

情(なさけ)をかけて諦(あき)らめませうとおもふても諦(あき)らめられぬ恋(こひ)しい

さぞね結句(けつく)おもひが増(ま)して来て愚痴(ぐち)の涙のたへまもなく恋

我侭(あご)して詫(わび)すると思へまんも德のうへ勉(つと)め上りのしまうと

悪(あく)まゝのも覚悟(かくご)のまへたちまちまんまと捨てありとも

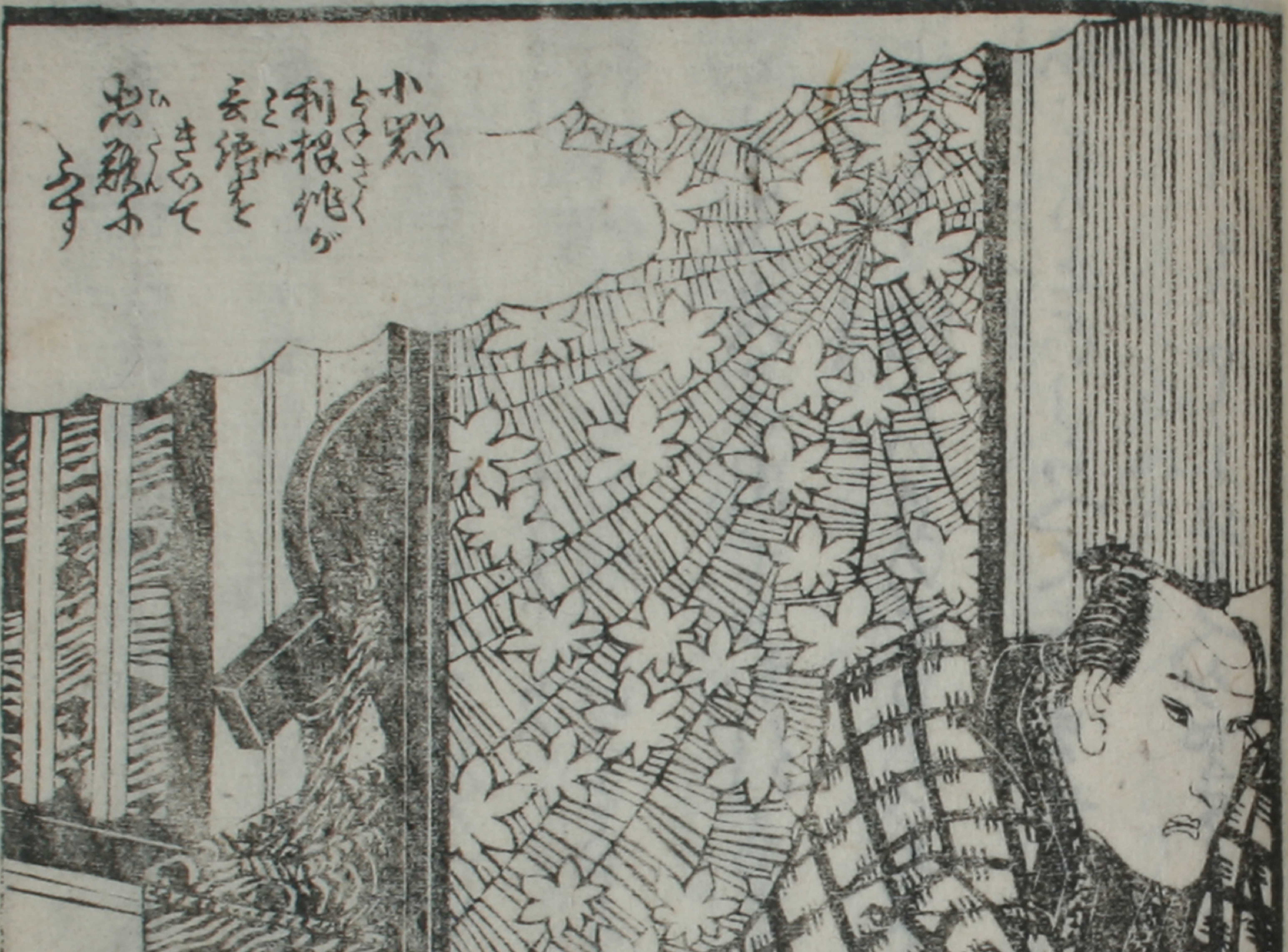
あまねくのお備で善しくこそ孫がふ通りのなかまとこそれいろを
楽しきふ流らの苦海のうき中を遠思しく善しいす経
そのやうふ小岩がんをおもひやり義理立をして知が向ふが
愚有足可忌のへうどうらあり難くとあいしいとあきらんとあ
おもひ八拾人のサまがある森といふめんどうら扨きありやせんろ
きおしてたんとおあんまんしいひ名付けのおりこさんでト披イさ
ものを可笑くあくツてどふかしいせい経女だつらのえんの床の
間の並ものは京内の夫人で姿そうけといふ楽しきこそ

世間に游人島でもあまた勝手辺に用のありとも嘉や且も
又ゑきんじで親ぐアゝ游人ぜろ〳〵ぐその気で素振致せしも
して仕手おくんあんせず小岩さんの呑も済ろちも押ニ通ろや
いゝてあふ嬉しう持ぞやゝゐすそあふば破家押の遠ひるすを
りよ女ぞト気嗽でおくんあんすなされも夫ッ諸悪縁の憤き
りんぐゐ国果で持ぞやゝゐす親〳〵三重戸咲寄も打くんあじゐすぞ酒の諸ら
や合イ時の肉と水性な風ニさまゝれて手んの技ぐ末等ゑ
らんあふら兄弟ハ窮さ游人ろ〳〵三ゑのお情のくまゝきがん

妻娼妓も身に逢れぬしふまうせし比丘姉どもとも好ふあき異し
飯へちの口とも逢れめへぜひへ死んでもかまふすれぬ結しいせんさく去
比と紀花両ふ実を結ぶ是倡妓ふ然あるの徒とイトスども
此の仙境ふいるまゝあるまゝ迷し若一個の適あまあへく
住るを情ふあづからぶ優曇波羅の華のごとく千歳の
亀の浮木の孔ふ値るがごとし悟しむべし悟るべし
春ふ又利根姫小岩が一旦死して蘇生しそふ溯ふ曹浅子
出して姿をみるより色念む花の春ふる又寺し娘の子

夫由静の申し漫に頭を得して離去が嘆きまゐらせん
すれと吾家に同伴ひ来りて其身の上をも伴かへ傍めて
頼りなく思ふ君が為の人も又役さの時に離去をさせめて
猶しかりとも静の心切なれと静の身から擁護して
くすみへ殊に往けば君に心くるし三浦屋が許に招くまゝから記
やしは[illegible]めおくへみめぐりあひ梁が悚れ慄きて逃れ去りしを離れ
ゆるさ[illegible]情夫最も悔しくて其故よしを聞きて[illegible]の如くに勧め浦へ吉まかせ
吾身も孫魂を案じ出しまゐらせて[illegible]に折にて末の事が抱くのくるしさ[illegible]も

実の父と知り利根兆も吾娘と知って互ひに須に袖を絞り
角ても果しなかれバとて別るゝがたちまち悪鬼の暗ま
ん迷ひ小岩を掛けてかくまのしを今ハ後悔なし幾年
して体よく此家を追出さんと悪人の独ふ深よも吾子の
可愛さ慈しきに仏も鬼と知りしれ赤の他人と志ふれども
小岩ハそれと夏ふも志らバ只管さ孫兆を待りとして其らの
望ふおあしが難有ふも此ふどふたくてそぐ道もなかりしふん
あふバもあれじよび又もやうきく入り知らう有頂天トあり


小男は
とはさく
利根性が
とだ
妄語を
きいて
悲歎なす

あら情なの仕んやとかとち邪なる我なれども此誓しく猿く
さしてその身くをおりしが孫娘も御とまくの今宵しと
引こまりて深くもせばんどが小岩独りきを痛め〳〵泣
とくし利根娘さん御容貌は生ともよふかぎりますまへ此頃の時候の
こちきふ大きな風でもお引なされちらへ寒く妙ふ出しでも
よりませ給ひものでもあつまつばきまあさへいつてくださいませ
御とありときしらへて上々ますゞ〳〵あり難くござります
其のすその思ふ御母さんが来ましくいふてなさる程尚更ふ便が

娘して楽でどふもかうもありませぬ暇でも欠てもござり
ませぬばゝあばゝお嬢ひいきばかりますます不器へぶん不気分の
思ひ附た下れの物も給る気はありませんがとゝさま無理かも止めて
命ひか金欲さ中より産まされました今世間へがらがら大事もと
私しが実の父さんの事なども持つて居ますす是がいつそ悲しく
ありがたき事悪事杉さなもあの事なる気体めきはた大事んしく
此くの仕合しぶ運定めて又わるい運ひでどふぞせうしわすまへも
なくして私その運で市川へも行るまでもあし親里へも寄らず

久
寝られずん細さの独り歎き待つを待つの身の
うしろめたさ全体あきれしとはいへどもしかりな
こんな邪魔を待ちわびてあきんすとやほとにふしぎなる
内縁ばしく離れさ女のくるい通ひを染めに付けてあらはいと
ふしきの女の身のうへ今咲かる花の香色気をそえく
喰出して難波の梅の薫りやらよし野のさくらのさかり
あら横ならぬ堅からぬ中分の身は娘ざかりおしい
素縁めをふり捨て造り花は女郎の傾城のいえみる花魁を

男しかふとゑ蓼食虫も好くと能いふもので御座ります
米〽浦風にちと持ちらと錦画で見てきましたはおかしらん
善悪邪正のお迷ひなさるも尤もなれど私しのかうなる
此方等らず鈍い迚もお気なへのいねたつと締めて居るんざるの
悪魂鬼く様生りかゝして世界の悩悪み好ら気に吾々を
あらげせて歩くら乾図を見て居よといふはなんの事ふひへ
亦ト二形の分しうごぎります 米〽ハテ夫れも是も皆縁づくで
ござんすゆへこれも又どや世界の為善悪邪正さまの御為ト

却説一手だんまりて除ものでくるくるとかへり猪浦さんと西国と

さてツてゐてみれバこれまり携傘て行が渓見花転飾ッて誓え

姿と恋路本地の撫子の姿とくらべてみれバ雪と墨ほどまア

らんまふ余気な女に伊みが許ッて慌さんしくろそのん庭の

可愛きないひたくるすもよいいそず様を抱て帰りましよ

それから法くじ考へてみれバそろそろどこか申まろうくしひ

花の姿を望れ本かして並ぶまするとお折角安寧の鮮

奥さまへまし舞られて仕舞もは不都合様はいめのごと

あのまへ人気の身をまゝが他人のあきなしさわんまり拙者
往来して縁気ふ見ん独のすやくや四十面さげて筆とも恥ず
入らざる煩悩の絆をとめまり迚も拙ふがね身うろんと
お念仏ふ紛らしても此道ばかりは思案の外渡六波羅の
上人さまハ七十ふあまるおとしでさへ京極の息女ふ十六七の
端正美麗ふ迷ひし例もありとしお寿でも善知識でも
生が丸夫の的りまへもと小宮さん実めて行が流れませうが
娘を恋を嬉思して喜さ一夜のお情が拮搆る子葉の

百姓なりとも俗なりとも同じ事ます世界の人の皆出されねやうに

悪い心をおこし明暮親を見ても唇がほころびの事でござり

ますまして小兄弟に親兄弟を打つ人もあるぐらゐ一旦會を

捨てられ善悪の見分けの嬉しさに親とも義理の恩の

尊く思へまれども此子はあまりて嫌な国つき言

捐も思へ我の事もちがつて和へ実の父さんの言も

抑の唇まですものをなさるものを思(あはれ)さるる

りんで父さんをなまんも娘の為にと言つてしんた

安堵して儘に思ひ寝のうへを契りつゝまた長文どもなき
るすを守つ妻もとらつを恋しく思ひまするとへさすがにさうで
あらうと存じてつひ書すらゐやア丁偏でもなし嚊でも
なしあゝ実誓文我ものが鮑の縁の桂川行おひまする
若気見嫌がるおさんの娘気をさ義理詰にしても拍て暮れ
それがどふあつても承知なら都へ来て居んが縁ひのたね
命ならば悔られぬ葛籠まゝしのまゝなれども此の世を離して
りきんせおやまへの姿が図ふなさらぬびろしも続生して帰りおて

仕舞ますハテこなさんは几帳しく律義さの女ぢやう
離縁をなされさとりは縁執をなされば何との世居へ遣
高はその後市川屋の内へ振り出んで引んまづなやは思し
物は留ツて禅ろと壺の清ふもりは還すじや一旦死なさや
五昨では義生ツさふれ遠ひもまし便ろら下が見なさふ
誰も幽灵ぞと物りの者もござんすまなは此病ふかうして居さん
まれぜ精く小弱な酒の親ぞあしてをてたより振られせ
結合物のひの半縁がし身火ぶきと切ツてなまししくえく

ゆうと思案してうしが愛ひの平念せゝふとゞめぐしくぐ
さんせられ仏を合せて拝ゝますと日頃ふ似合ぬ魔がさして
おみどうーの仏法も思ひ一遍とは後まで義理も情も一向
却ってそれとも途方ふ暮れて忙然と娘への一ト筋ふ摘の網
の縁れとて千筋ふむせぶぞかり

恩愛二葉艸後編上巻終